

新規選定① 河畔に成立した風情たどる茶屋町

かなざわしかずえまち

金沢市主計町伝統的建造物群保存地区

所在地 石川県金沢市主計町の一部、

面積 約0.6ヘクタール

金沢は加賀百万石の城下町として発展し、現在も城下町の骨格が色濃く残る。主計町は、城の北東、旧北国街道が浅野川を渡る浅野川大橋のたもとに位置し、町名は加賀藩重臣、^{とだかずえ}富田主計の屋敷地があったことに因むとされるが、寛文7年（1667）の絵図では町人地となっている。藩による公許はなかったが、江戸後期には茶屋町的な性格を持っていたと考えられる。主計町は、明治末期から昭和前期に最盛期を迎えており、今日においても茶屋町の佇まいをよく伝えている。

保存地区は、東西約150m、南北約140m、面積約0.6haの範囲で、最盛期の茶屋町の範囲のほぼ全域にあたる。北側の浅野川と南側の斜面に挟まれた平地に位置し、東西両端付近には、旧東・西内惣構堀^{うちそうがまえぼり}が水路として流れる。地区は浅野川沿いの表の通りとそれに平行する裏の通り、それらと直交する数条の路地が骨格をなす。町家は、切妻造平入、二階建を基本とし、一階出格子や建ちの高い二階、軒下の庇などの正面意匠や、内部の数寄屋風の繊細な意匠によって構成される。浅野川沿いでは、茶屋町の最盛期に行われた三階の増築が往時の繁栄を伝えており、裏の通りではかつての石置き板葺の緩い屋根勾配を維持した建物が残る。

金沢市主計町伝統的建造物群保存地区は、茶屋町の繁栄とともに育まれた、意匠的に優れた伝統的建造物が多数残る。三階を増築した町家が建ち並ぶ浅野川沿いの景観と、旧来の茶屋の様式を維持した町家が残る裏の通りの景観により、変化に富んだ歴史的風致を良く残し、我が国にとって価値が高い。

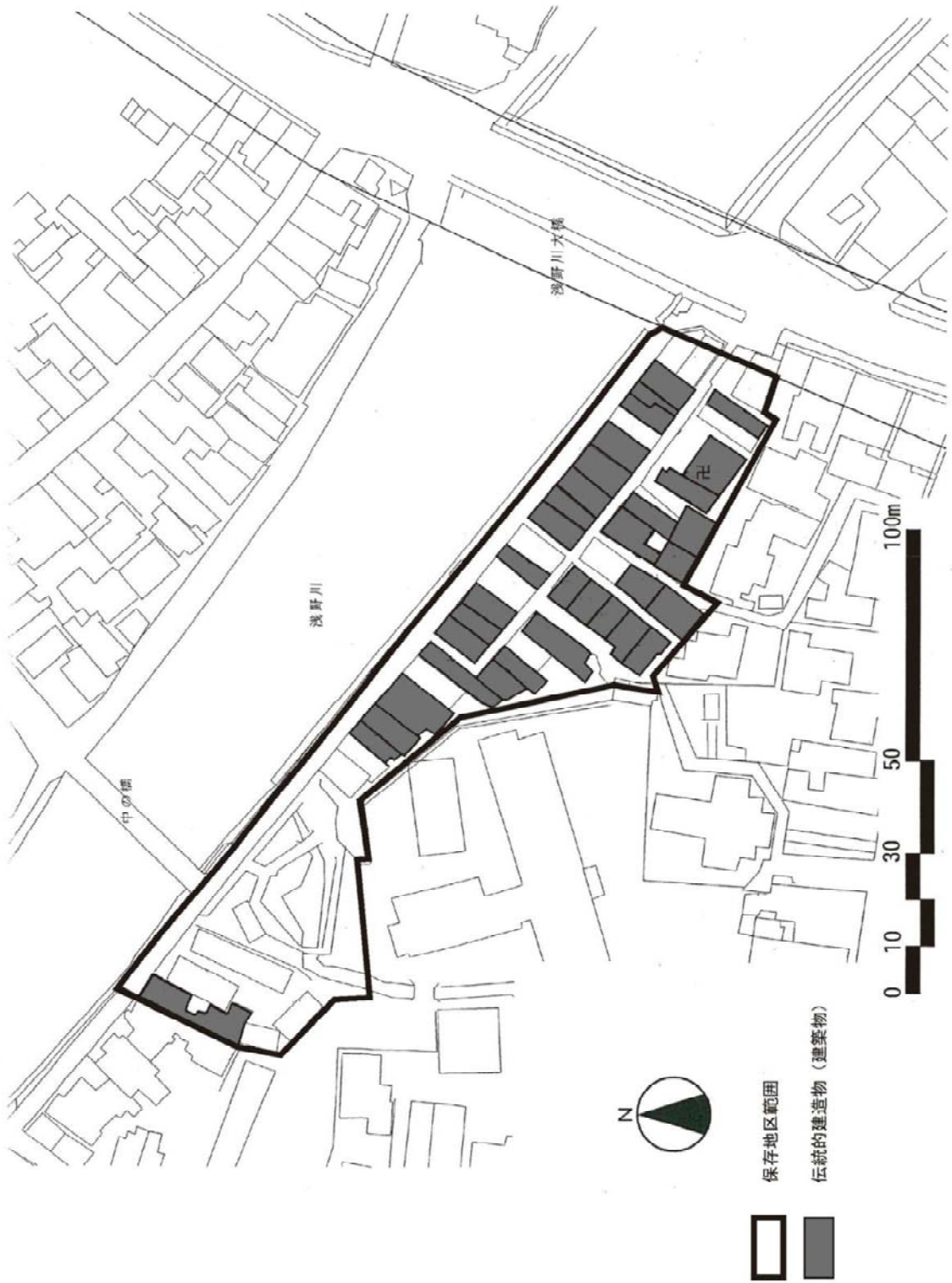


表の通りの町並み



裏の通りの町並み

金沢市主計町伝統的建造物群保存地区



新規選定② 中世の港町から発展した近世城下町の商家町と茶屋町

おばましおばましぐみ 小浜市小浜西組伝統的建造物群保存地区

所在地 福井県小浜市小浜香取及び小浜飛鳥の全域並びに小浜男山、小浜鹿島、
小浜貴船、小浜大原、小浜浅間、小浜白鳥、小浜日吉、小浜住吉、小
浜神田及び青井の各一部、
面積 約19.1ヘクタール

小浜市は福井県の南西部に位置する。小浜は、中世には日本海側から京へ物資を中継する港町であり、同時に若狭国の政治の中心地でもあった。慶長6年（1601）に京極高次が小浜城を築いて城下町を整備し、貞享元年（1684）には、町人地がさらに拡大し東、中、西の3組に区分された。この頃には、町人地の西に茶屋町が形成されていたと考えられる。小浜は、近世から近代にかけて数度の大火があり、河川改修等も行われたが、町人地の町割は近世前期の形態がほぼ現在まで継承されている。

保存地区は、南北約580m、東西約790m、面積約19.1haの範囲で、小浜城下の町人地のうち、西組のほぼ全域にあたる。保存地区を縦断する丹後街道が東に折れ曲がる辺りを境に東が商家町、西が茶屋町となり、後瀬山麓及び西端部に寺町が形成されている。保存地区の敷地割は明治4年の地籍図とほぼ一致し、近世末期の地割が良く残されている。町家は、切妻造平入、棧瓦葺であるが、商家町と茶屋町とでは多少異なり、茶屋町では2階前面を縁や出窓とする茶屋の様式をもつ建物が多くを占める。

小浜市小浜西組伝統的建造物群保存地区は、中世の港町から近世の城下町へと発展し、町域が拡大するのにもなって整備された近世前期の街路構成並びに近世末期の地割を良く残し、近世から近代に建てられた町家や寺社建築など、商家町や茶屋町、寺町が併存する近世城下町の歴史的風致を今日に良く伝えており、我が国にとって価値が高い。

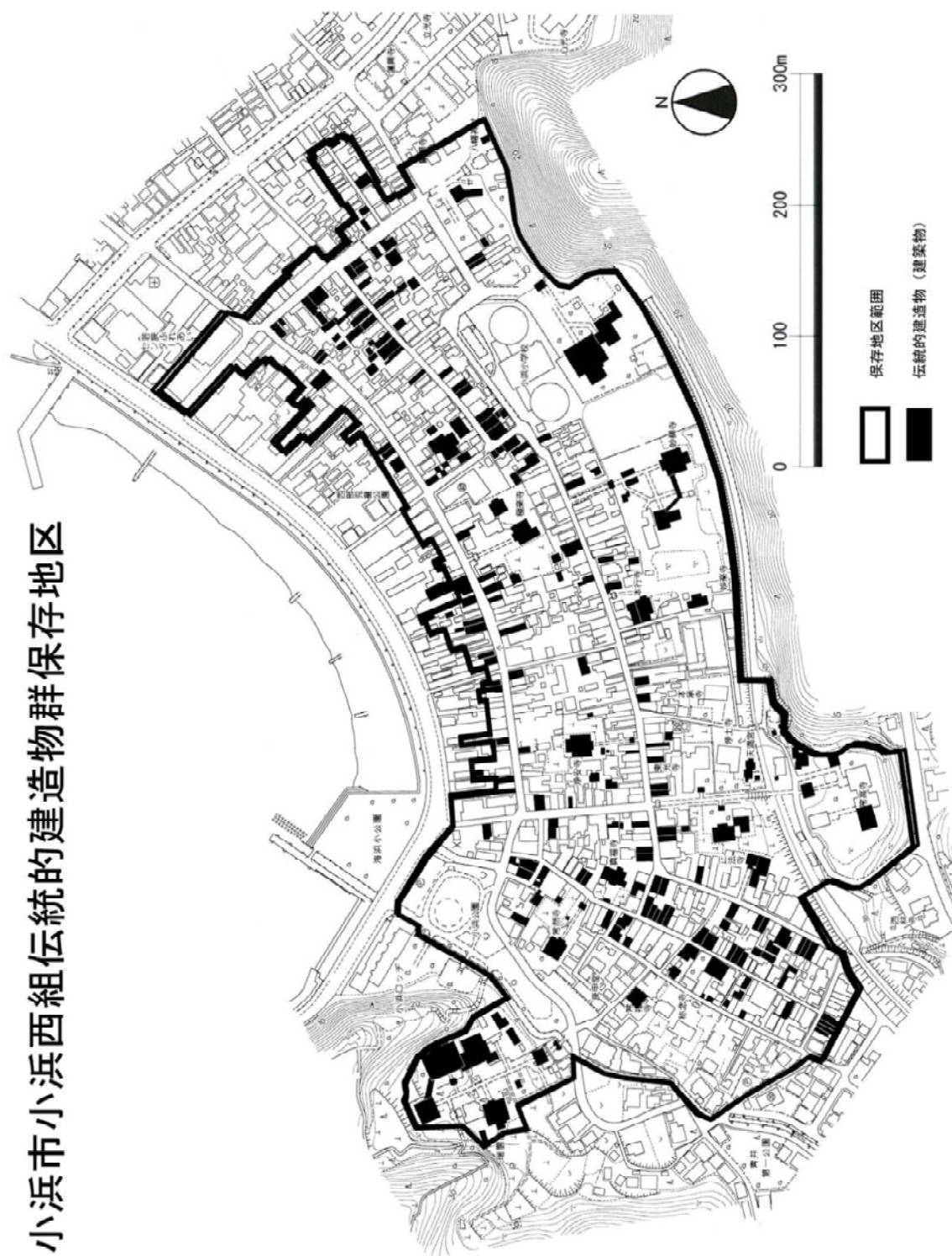


商家町の町並み（小浜鹿島）



茶屋町の町並み（小浜飛鳥）

小浜市小浜西組伝統的建造物群保存地区



新規選定③ 漁村から鯨組の創業と廃業を経て発展した離島の港町

ひらどし おおしまむらこうのうら

平戸市大島村神浦伝統的建造物群保存地区

所在地 長崎県平戸市大島村神浦字西中町、字西町、字本町、字東流川原、字小濱
及び字三軒家の全域並びに神浦字西片町、前平字和田ノ上、字辻山、
字足洗、字小坂、字前ノ辻、字通山、字片峰、字葉山、字山口及び字城山の各一部

面積 約21.2ヘクタール

平戸市は、長崎県の西北部に位置し、平戸市大島村のある的山大島は、平戸市街の北方約15kmの玄界灘に浮かぶ島で、神浦は大島の南東部に位置する。的山大島は遣明船の寄港地として知られ、中世末には既に神浦に集落が成立していたと見られる。寛永年間（1624-44）から平戸藩政務役として支配した井元氏^{いのもと}が寛文年間（1661-73）に鯨組を組織し、その本拠地を神浦に置いた。このとき湾が埋め立てられ、組網工場等の施設が作られた。享保年間（1716-35）の鯨組廃業後、これら施設の跡地等にも町家が建てられて現在見る町並みの骨格ができ、その後は大きく変化することなく維持されてきた。

保存地区は、東西約700m、南北約650m、面積約21.2haで、神浦の集落と海、河川の水面、周辺部の高台に建つ社寺や旧耕作地等を含む範囲である。江戸時代中期から昭和前期の町家が建ち並び、離島の港町の景観を色濃く伝えている。街路の山側は旧来の敷地で奥行きが浅いのに対し、海側は敷地奥行きが深く、鯨組創業による埋め立てによって陸地となり、享保の廃業によって町家が建てられていった敷地と考えられ、集落形成の過程を知ることができる。町家は、切妻造平入、棧瓦葺で、街路の屈曲に合わせて台形の平面が多いのが特徴である。

平戸市大島村神浦伝統的建造物群保存地区は、近世から近代にかけての離島の港町の歴史的風致を残すとともに、中世末期から近世初期にかけて成立した漁村集落が鯨組の創業と廃業という出来事を経て近世的な港町に変容していった姿を今日に良く伝えており、我が国にとって価値が高い。



西神浦小倉町の町並み



